

## 人生 100 年時代の金融老年学

2017 年も末に近づいた頃、銀行や証券、保険など金融業界で一躍注目度を高めた言葉がある。フィナンシャル・ジェロントロジー（金融老年学）である。

金融老年学とは、高齢者の経済活動や資産選択など、長寿・加齢によって発生する経済・金融取引が社会経済システムにどのような影響を与えるかを研究する分野であり、特に日本においては超高齢社会と金融の関わりが主なテーマとなる。

きっかけは、金融庁が次年度にいかなる方針で金融行政を行っていくかを示す「金融行政方針」において、初めて次のような文章が記述されたことにある。

「高齢投資家の保護については、これまでも販売会社における態勢整備が進められているが、フィナンシャル・ジェロントロジー（金融老年学）の進展も踏まえ、よりきめ細かな高齢投資家の保護について検討する必要がある」

（「平成 29 事務年度 金融行政方針」2017 年 11 月 10 日公表）

金融行政方針では、世帯主が 60 歳以上の世帯が全世帯の家計金融資産の 6 割以上を保有し、金融資産のほかにも住宅や土地などの実物資産を多く保有していることを指摘しつつ、退職世代の金融資産の運用・取崩しをどのように行い、幸せな老後につなげていくかを課題として挙げている。

一方、日本における平均年齢は 2015 年の 46.4 歳から 2030 年には 50.0 歳に上昇すると予測されている。また、65 歳以上人口比率は 2030 年に 30% 台へ達し、なかでも 100 歳以上人口は、2015 年の 6 万 2,000 人から 2030 年に 19 万 2,000 人、2040 年には 30 万 9,000 人に増加するとみられる（国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成 29 年推計）」）。日本の高齢化は今後も一段と進んでいく見通しである。

こうしたなか、政府は「高齢社会対策大綱」（2018 年 2 月 16 日閣議決定）において、「高齢期に不安なくゆとりある生活を維持していくためには、それぞれの状況に適した資産の運用と取崩しを含めた資産の有効活用が計画的に行われる必要がある」として、金融老年学を踏まえて、「認知能力の低下など、高齢期にみられる特徴に一層の対策を図る」としている。

これからは「人生 100 年」を念頭にした人生設計が必要になるのかもしれない。そこでは、企業にとって、顧客との関係性において長期継続的な視点もより重要となつてこよう。いま、政府や金融庁が促すまでもなく、さらに進む超高齢社会に対応したビジネスモデルや社会経済システムの構築が求められているのではないだろうか。

（撞球者）

当コラムの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

## リクルートスーツは制服？

3月1日、来年卒業を迎える大学生を対象とした会社説明会が解禁となった。これにより、学生の就職活動（就活）が本格的にスタートし、これから初夏にかけて、リクルートスーツを着用した若者たちと街ですれ違う機会が多くなる。

人手不足が深刻化している中で、今年も就活は「超売り手市場」と言われている。かつて、私が就職活動を行ったバブル全盛期の1990年も「売り手市場」と言われたが、今とは全く異なる環境や構造下での「売り手市場」であった。

その後、インターネットの普及で学生と企業の接触方法や頻度は激変したが、変わらない点もある。リクルートスーツだ。ただし、厳密には、かつてと比べリクルートスーツの画一化に拍車がかかっているのではないだろうか。

バブル全盛期当時、女性のスーツは黒だけではなく紺やグレーあり、シャツもレース襟やノーカラーなど様々なタイプが見られた。華美にならない程度にアクセサリを身につけている女性も珍しくなかった。要は自分に似合っていれば問題ではなかったのである。

しかし、現在は大学側の指導やアパレルメーカーの推奨という背景もあるのかもしれないが、女性は黒一色のスーツに襟型がシャツカラーかスキッパーカラーの白シャツ。太めのヒールのシューズに、A4サイズの入る黒バッグ、というのが定番だ。企業説明会や複数企業が参加する大型就活イベントの会場などでは、ほぼ全員が同じようなスタイルで臨んでいる。1年後の入社式でも同様だ。指定も強制もされていないものの、まるで日本の企業社会の制服のようだ。

今の学生は、早い時期から就活に備えて企業研究や業界研究に取り組み、自分自身のプレゼンテーションやディベート形式のグループディスカッションの訓練を重ね、能力やスキルを高めている。にもかかわらず、以前就活中の学生に画一的なリクルートスーツスタイルについて意見を聞いたところ「考えなくてすむので楽です」という答えが返ってきた。学生は就活用の一時的な対応と割り切っているのかもしれないが、そういう発想（割り切り）をこれからの社会を担う若者に口にさせてしまう現実に愕然とした。

近年、オフィスではカジュアルスタイルが定着し、スーツ着用の機会が減少している。一方で、学生の採否を決め受け入れる側の企業社会は、暗黙のうちにより画一化されたリクルートスーツスタイルを良しとする習慣を作り上げてしまっている。

バブル期に就職活動をした世代が、今は採用の決定権限を有する立場となっている。企業が若者に対して自由な発想やブレイクスルーの役割を求めるなら、もっと自由な就活スタイルの時代が来てもおかしくないと思うのだが、どうだろう。

(Y.M)

当コラムの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

## 国も私もキャッシュレス化、推進中

遅ればせながら、個人的にキャッシュレス化を推し進めている。

きっかけは、家計の管理であった。これまで買い物は現金で決済していたが、レシートの金額を家計簿に転記することが煩わしく、ネットショッピング時のみ使っていたクレジットカードも、商品購入から口座の引き落としまでのタイムラグがネックとなり、家計簿が長続きしなかった。そこで支出金額を把握しやすい仕組みはないかと考え、辿り着いたのがキャッシュレス化である。

まずはクレジットカードに代わって、デビットカードを採用してみた。自身のメインバンクが提携するデビットカードは、インターネット経由で簡単に申し込むことができ、10日ほどで手元へ届いた。カードで決済すると即時に銀行口座から引き落とされるため、懸念事項であったタイムラグは解消され、専用サイトで決済履歴を確認することができるので、レシートを取っておく必要もなくなった。

次に、JR 東日本の IC カードアプリ「モバイル Suica」をスマートフォンに入れて、もう一步キャッシュレス化を進めた。こちらを使えば、レジのそばにある専用端末にスマホをかざすだけで支払いが済む。数百円などの少額決済で、わざわざデビットカードを使うことに若干の抵抗を感じていたが、それも解消された。モバイル Suica に入っている金額が足りなくなれば、スマホのアプリ上でデビットカードからチャージができ、決済履歴の確認も可能で便利だ。こうして、1,000円未満の買い物はモバイル Suica、それ以上はデビットカードと使い分けることで、日常の買い物の多くはキャッシュレスとなった。家計簿については、スマホに入れた Excel (アプリ) へ金額を打ち込む方法に変えたところ、挫折することなく続いている。

経済産業省によると、日本のキャッシュレス決済比率は18% (2015年) で、中国 (55%) や韓国 (54%)、米国 (41%) と比べると、普及度合いに大きな開きがある。こうしたなか、2017年6月に閣議決定された「未来投資戦略 2017」では、10年後の2027年6月までにキャッシュレス決済比率を4割程度へ拡大することを目指している。

キャッシュレス化が進めば、人手不足が深刻化する飲食店などで業務の効率化が期待されるほか、訪日外国人観光客にとっても決済面の利便性が向上するだろう。先月2月の春節 (中国の旧正月) 商戦では、三越などの大手百貨店が都内の一部店舗で中国人向けスマホ決済サービス「アリペイ」を導入するなど、企業側もインバウンド需要を取り込もうとキャッシュレス化を推し進めている。

米大手カード会社によると、電子決済の利用が広がればオンライン通販の拡大などが見込まれ、国内総生産 (GDP) を押し上げる効果が考えられるという。キャッシュレス化は経済成長の一助になると期待され、国を挙げての推進は今後一段と進むであろう。

(シマウマ)

当コラムの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

## ペットの高齢化と最新飼育事情

今年 17 歳になる猫 2 匹と暮らしている。どちらも生後 2 カ月で私のもとにやってきたのだが、ついに平均寿命などという文言を目にすると胸騒ぎがしてくる年齢になった。

一匹は高級猫種専門のブリーダーから譲り受けた珍しい猫種で、契約の際には飼い主となる私への細かい審査までであった。もう一匹は、近所の道端で衰弱死しかかっていた雑種の三毛で、家族がコンビニの袋に入れて連れ帰ってきたものだ。性格も真逆の二匹は初めは喧嘩ばかりだったが徐々に馴染み、これまで元気に過ごしてきた。

そんな猫たちが今年からは年始から揃って病気を患った。以来、毎週末は二匹交互に動物病院のお世話になっている状況だ。こうした経験をして初めて、病院は高齢の動物でいっぱい、飼い主は皆、長期間、高齢のペットの体調を案じながら生活していることを知った。

犬猫の高齢化に関しては、東京農工大学と日本小動物獣医師会が 1990 年から 2014 年までに 4 回、全国の動物病院のデータを利用して行っている大規模調査があり、対象の 25 年間で犬の寿命は 1.5 倍に、猫は 2.3 倍にまで延びたとしている。ペットフード協会の「2017 年全国犬猫飼育実態調査」によると、現在、犬の平均寿命は 14.19 歳、猫の寿命は 15.33 歳。そして、犬の 58.9%、猫の 44.7%が 7 歳以上の高齢期にある。

こうした状況にあつて、ペットを取り巻く世界では、高齢化対策としてさまざまな技術やサービスが開発され、進化している。

第一に、一般の動物病院での診療の高度化が挙げられる。現在ではエコー検査、心電図、レントゲン、さらには内視鏡検査までも可能な病院が増えてきた。体が小さくて体調の変化が速い動物たちの状態を多面的につかむことができ、正確な診断が下しやすくなっている。

第二に、発症率の高い疾病に関して、フードの進化が目覚ましい。例えば高齢猫に多い腎臓病や心臓病では、治療食として薬のような機能を備えたフードが登場している。市販フードに関しても、健康管理上の悩みごとに多種の高機能フードが開発されてきており、高齢で歯が弱ったり、食欲が落ちたりしている状態のペットでも食べられるよう工夫がされた総合食や一般食（おやつ）が充実してきている。

第三に、ペット保険の充実である。より高度な医療を受けるならば飼育経費がグンと跳ね上がる。人間のように国民健康保険があるわけではなく、ペットの医療費は高額になることも多い。そのため、ペット保険に対する需要は高まっており、高度医療対応商品、通院費対応商品など、サービスが多様化し利用しやすい商品が増えている。

今後もまだ伸びる可能性を見せているペットの寿命。大事な命と長く居たいというのは飼い主全員の願いである。その時間がより快適で楽しいものとなるよう、高齢ペットに対する商品は今後も開発が進んでいくのではないだろうか。

(金田)

当コラムの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。

## 「ムーミン」問題の捉え方

2018年1月、大学入試センター試験の地理Bで出題された問題が話題になった。試験問題では、ノルウェーとフィンランドを舞台にしたアニメーションと、両国の言語との正しい組み合わせを選択する問題だった。

選択肢のアニメとしては、「ムーミン」と「小さなバイキングビッケ」をあげており、出題直後から受験生による戸惑いの声に加え、原作ではムーミン谷の舞台がフィンランドとは断定できない、あるいは大学入試センターの試験問題としてふさわしくない、不適切どころかむしろ良問である、などといった指摘が相次いだ。

大学入試センターは、出題された画像の景色からフィンランドが類推できるとして、「キャラクターの知識は直接必要なく、地理Bの知識・思考力を問う設問として支障はなかった」という見解を示した。

さらに、通常国会において「大学入試センター試験の『ムーミン』に関する設問に関する質問主意書」が提出され、政府は「問題において引用される資料や回答の内容は、いずれもそれ自体が高等学校の教科用図書に掲載されていないからではない」とする答弁書を閣議決定するなど、当試験問題に対する議論は広がりを見せていた。

こうしたなか、2月20～22日にかけて、フィンランドのティモ・ソイニ外務大臣が来日した。在日フィンランド大使館によると、ソイニ外相の会見において日本の大学入試センター試験に出題された話題になった「ムーミンの舞台はどこか」などについて記者から質問があった。その質問に対して大臣は胸に手を当て、「ムーミンはフィンランドに存在します。私たちの心の中に。日本の方々の心の中にもあると嬉しい」と応じたという。

私もこの設問に挑戦してみたところ、確かにアニメを考慮に入れなくても問題は解ける。両国の地理や自然環境の特徴は提示された画像からも読み取れる。他方、キャラクターに意識が向くと、多くの情報に混乱する可能性もあろう。この場合は、数学のトポロジー分野で有名な「ケーニヒスベルクの橋の問題」などの考え方を援用し、余計な情報を排除して重要な情報だけを抽出するということができるれば、解答に至るヒントが得られるかもしれない。

一般的に、受験生にとって、センター試験はそれまでの努力を一気にぶつける場であることは論を待たない。

しかし、今回、さまざまな議論を巻き起こしたセンター試験の「ムーミン」問題は、ソイニ外相の発言で政治的に落ち着いたともいえる。2019年には、日本とフィンランドの国交100周年を迎える。これを機に、フィンランドのことをいろいろと調べたり、関心を高めるきっかけにするなど、前向きに捉えてはいかがだろうか。

(撞球者)

当コラムの著作権は株式会社帝国データバンクに帰属します。著作権法の範囲内でご利用いただき、私的利用を超えた複製および転載を固く禁じます。